

匠村

SAKABAYASHI

隨筆特集



# 逐林

SAKABAYASHI

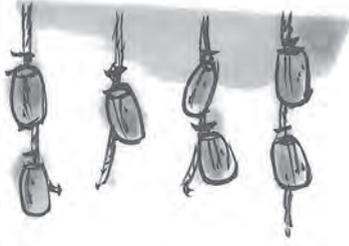
隨筆特集



# 涸林

SAKABAYASHI

随筆特集



日本最初の女子留学生

廃線跡の遊歩道

絵と文 趣味

写メール短歌の現在と未来

ほろ酔い詩歌紀行 — 吉井勇の酒

どんぐり谷

東日本大震災とスーパームーン

バベルの塔 — 原子力発電所事故 —

絵と文 クルクマ

人の縁 — 須知徳平氏のこと —

池井 優 … 4

高橋 和 島 … 6

堂 昌 一 … 8

安 森 敏 隆 … 9

日 高 昭 二 … 11

内 野 潤 子 … 13

宮 地 智 子 … 15

杉 本 忠 夫 … 17

中 西 美 子 … 19

志 村 有 弘 … 20



絵と文 蝉とビール 佐川 毅彦 … 22

学問美談 志村 栄守 … 23

パチンコの罪罪 桐原 良光 … 25

定刻に五分遅れた 片岡 義男 … 27

丙吉問牛 山西 靖彦 … 29

絵と文 カイザーワイナリー親子が日本にやってきた さかもと ふさ … 31

裏に会った男 永岡 慶之助 … 32

フェアリード 山本 千明 … 34

生きることとは選択、ささえはご縁、そして万事塞翁が馬 宮本 富夫 … 36

小説風・江戸神仏歳時記(23) — 市ヶ谷・亀ヶ岡八幡宮 郡 順史 … 38

表紙・グラビア…石あかり

# 日本最初の女子留学生



## 池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

明治四年十二月二十三日、横浜港は大変なにぎわいを見せていた。岩倉使節団一行百七名が欧米に向けて出発する。そのなかでひとときわ目立つのが、振り袖姿の五人の少女であった。北海道開拓使が募集した留学生に応募してアメリカにわたる五人である。見送りのひとびとには「あんな幼い娘をよくもまあアメリカなどに遣るものだ。親の気が知れない」といった表情がありありと浮かんでいた。当然である。五人のうち、二人が十五歳、次が十二歳と十一歳、最年少の一人はまだ八歳に過ぎず、しかも留学期間は十年と決められていたからである。

アメリカに女子の留学生を送ろうとのアイディアは北海道開拓の先例として、アメリカの開拓事業を視察して帰国した黒田清隆から出たものであった。アメリカでの女性の教養と地位の高さに感銘を受けた黒田は、開拓使次官に就任すると、女子留学生の募集を実行に移した。期間十年、旅費、学費、生活費に加え、年間八百ドルの小遣いまで支給するという現在の感覚からすれば破格の好条件であった。しかし、明治維新からまだ四年、首席全権を引き受けた岩倉具視はちょん髷、腰に二本の刀を差して旅立った時代である。最初の募集に対し、応募者なし、第

二回募集にやっと五名が集まった。五人には三つの共通点があった。一、年齢が若いこと、二、父親が旧幕臣で、明治政府の中枢からはずされていたこと、三、外国語に堪能あるいは海外経験がある親族がいること。応募した全員が合格で、年齢にこだわっておられず、新政府のなかで出世の望みが断られた親が娘に望みを託し、さらに英語が理解でき、自分の経験から可愛い娘を海外に出しても大丈夫と判断したことがみてとれる

船酔いに苦しんだのち二十三日目に朝霧にけむるサンフランシスコに着、振り袖に稚児髷姿の五人の少女はアメリカ人からとって夢の国からやってきた妖精のような存在であった。約一カ月の汽車の長旅でワシントンに着した五人は、はじめ同居するが、やがてアメリカ人の家庭に引き取られ、今日というホームステイを送るようになる。到着して十カ月、年長の二人がホームシックにかかり、これ以上の滞在は無理とわかり帰国することになっ

た。

残った三人の一人山川捨松は出発に当り母から「私はお前を捨てたつもりでアメリカへやるが立派に学問を修めて帰ってくる日を待っている」といわれ、そうした覚悟をこめて咲子という名を捨松に改名したほどであった。もう一人の留学生永井繁子は捨松と同じ東部の名門女子大ヴァッサー・カレッジに進学したが、こちらは三年で過程が終了する音楽科でピアノと音楽理論を学んだ。繁子は在学中アメリカの海軍兵学校に留学していた瓜生外吉と知り合い婚約する。

一番年少の津田梅子は、あまりにも幼く、小柄で預かったアメリカ人夫婦もはじめ戸惑ったが、すっかりアメリカに慣れ、物怖じしない性格と相まって、小学校、中学と好成績で進学していったが、日本語をすっかり忘れてしまった。やがて留学期間の十年が経ち、本国から帰国の命令がきた。丁度卒業の年がきた永井繁子は日本に帰ることになったが、ヴァッサー・カレッジ普

通科の捨松と、高校生の梅子はあと一年あれば卒業できるとあつて一年間の延期を申請、認められた。十年余をアメリカで過ごした三人、捨松と繁子は、日常会話には不自由しなかったが、梅子は帰国後家族との簡単な挨拶さえできない有様であった。永井繁子は、アメリカで学んだことを生かして後の東京音楽学校で教鞭をとると同時に海軍中尉となった瓜生外吉と結婚、七人の子どもにも恵まれる。

山川捨松は帰国した時は二十五歳、当時としては結婚適齢期をはるかに過ぎていた。縁あつて薩摩出身の陸軍卿大山巖の後妻となり、得意の英語と社交性を發揮、日本の近代化のシンボリック存在であった社交場鹿鳴館の花形となり、日本初のバザーを開催、赤十字の救済活動に尽力するなど大いに力を發揮した。最年少であった津田梅子は、華族女学校（後の女子学習院）などで英語を教えることになったが、自分の考える理想の教育を求めて再度アメリカに留学、帰国後女子英学塾を開校す

る。最初の塾生は十人、教職員、生徒、来賓全員十七名のささやかな入学式がおこなわれたのは、明治三十三年九月十四日のことであった。来賓のなかには陸軍大臣、参謀総長を歴任、元帥となつて侯爵を授けられた大山巖夫人捨松の姿があつた。捨松は女子英学塾の顧問、さらには理事となり、その地位と名声をバックに英学塾の発展に伴う経営に必要な資金の獲得、寄付の募集にさまざまな形で協力してくれた。この小さな塾はその後専門学校に昇格、日本における女性のための英語教育の中心的存在となり、現在の津田塾大学に發展したことはいうまでもない。

瓜生繁子は、数多くの音楽家を育てるとともに、夫外吉のアメリカ出張に同行、母校ヴァッサー・カレッジで講演を行つたり、外吉の海軍兵学校同期会の東京開催に尽力するなど日米親善に尽くした。英語で悩みを打ち明けるなど三人の友情は、帰国後も強かった。日本最初の三人の女子留学生、その果たした役割は極めて大きい。

# 廃線跡の遊歩道

わたしは名古屋までJRの快速電車で二十分強の多治見市（岐阜県）に住んでいる。

町の自己紹介をするときは「陶磁器やモザイクタイルをむかしから地場産業としてきたところですよ」と言ってきたが、最近はい中国製品に押されて陶磁器もモザイクタイルも影が薄くなってきたため「夏場は埼玉の熊谷市と肩を並べるほどの極暑となる、日本一暑い町ですよ」と、自慢にもならぬ特徴をあげることもある。

拙宅はJR多治見駅の南方約六<sup>キ</sup>〇余



の笠原と呼ばれる地域にある。

昭和五十三年まで笠原と多治見駅間は鉄道で結ばれていた。俗に笠原鉄道と呼ばれていた私鉄のローカル線で、開通当時は煤煙を撒き散らす蒸気機関車が走っていたが、昭和四十年代になるとジーゼル機関車に代わった。

これは、静岡県大井川ダムの建設現場で使用されていたものを買取り運んできたという代物だったようだ。

昭和三十年当時で、片道料金二十五円、一日十六往復（午前六時台から午後十時台まで、一時間に一本）の運転

高橋和島  
（作家・郷土史家）

をして、重宝にされた笠原鉄道は昭和五十三年十月に廃線となる。

理由は例によって、マイカーの普及によって採算がとれなくなったから、というものであった。

レールが取り除かれた鉄路跡は部分的に遊歩道へ生まれ変わるが、六キロ余の全面的整備が完了するのは今春になつてからである。

遊歩道には地場産業にちなんで「陶彩の道」という立派な名が付けられたが、わたしを含む、大部分の地元民はよそよそしいこの名を使わず、従来ど

おり、「笠鉄跡」と呼んでいる。

今夏の某日早朝、友人と二人連れ立って全面開通となった笠鉄跡遊歩道を歩いてみた。ものぐさな二人は廃線跡をまだ歩いたことがなかった。遅ればせながら、点検してやろうというわけだった。

歩き出すと、友人はすぐに「ふうん」とか「ほう」とか、嘆声をあげ始めた。

今の家に住むようになって三十年ほどしか経っていないわたしは笠原鉄道健在時代を知らないが、友人は通学、通勤などで長年、鉄道を利用して、記憶の中の沿線風景と目の前の風景を重ね合わせ、驚いたり、感嘆したりしているのだ。

「昔は水がこれほど澄んでいなかったな」

鉄橋跡を渡っているとき、下を流れる里川を覗きこんで、彼は言った。

陶磁器産業の衰退で、かつては陶土で白濁していた川に清流が戻ったのだ。

遊歩道は両側に民家の軒が連なる箇所を抜け、小さな公園に生まれ変わっ

た駅舎跡に着く。「笠原から多治見駅までの間に四つ駅があったけど、ここには駅員社宅があつて、高校の同級生がいたんだ。あいつ、いま、どうしているかなあ」

友人は、若い母親たちが木陰で幼児を遊ばせる公園を眺め回しながら呟き、さらに続けた。

「笠鉄は本当にのんびり走っていたから犬を連れて外出するときは、車両に乗せず、レール脇の小道を走らせるんだ。普通の電車だったらワンちゃんも当然置いてきぼりを食うけど、笠鉄の場合はのろのろ運転だったから、大して苦労もせず、嬉しそうな顔で後を付いてきたものだよ」

笠鉄は地場産業の工場や民家の横を抜け、水田や畑を見下ろす高台を歯がゆくなるような速度で走った。その車両を尾を振りながら小柄な柴犬が見栄えのしない雑種犬が追いかける。付いてくる犬を見て、励ましの声をかける乗客もきつといたに違いない。

田舎でしか見られない光景であり、

想像するだけで楽しくなってくる。

「この辺に警報の鳴る踏み切りがあつたはずだけどな」

見下ろす畑に作られたキュウリやナス、そしてトマトの出来具合を、自分の菜園と比べて論評していた友人は、首筋の汗を拭きながら小声で呟く。

やがて、桜並木越しに墓地の見える箇所差し掛かった。

「社会人になってからの話だけど、雨の日に終電で帰った際、この辺りでは人魂が飛ぶのを見たんだ。乗客はおれ一人だけだったから、本当に怖かったなあ」

夏の強い朝日を浴びた墓地は炎暑の一日の始まりを予感させこそすれ、薄気味悪さなぞ微塵も感じさせない。

「もう少し歩くと、旨いコーヒードクを飲ませる店があるから一休みしていこうか」

遊歩道の行く手を指差す友の声に、息を弾ませ、シャツの背中を汗で濡らしていたわたしは大きく頷いた。

# 趣味

堂 昌 一



私の趣味は家族が呆れた程徹底したものでした。まず子供が出来た時、カメラに、(現像まで)次に海に遊びに行くようになって、釣主にとローリング(竹竿、重り、釣針を手造り)仕事で外出が出来なく、熱帯魚を飼育(エンゼルフィッシュの産卵、孵化に成功。しかし不注意から全滅させ)次に、椿(接木で珍種の花を咲かせる)どの趣味も雑誌で紹介された。われながら一応プロの一步手前までいってと自負する次第です。

ゴルフをやらなかった事が残念です。プロゴルフも年々若くなり十代が活躍するようになった。日本人の体格とエネルギーが、上昇しているようだ。今女子プロが活躍している。いいフォームがお客さんを喜ばしてくれる。私もその一人かもしれない。

# 写メール短歌の現在と未来



## 安森敏隆

(同志社女子大学教授・歌人)

短歌は一四〇〇年の長きにわたって「不易」なるものと「流行」なるものの両面を常に捉えてうたわれてきた。

「不易」なる「いのち」の問題と時代の先端部の流行なるもの両極を常にとらえてうたってきた。

ここでは、「流行」の先端部としての「ケータイ」の歌について考えてみたいと思う。

・「か」で「顔はまあまあだけど」と

いう文が出る携帯の予測変換(吉田彩乃)

・辞典にもwikipediaにも載っていない自分らしく生きる方法(鳥居塚寛)

・身にそそぐ秋木漏れ日のごとき加護無垢なる先は限りもあらぬ(鈴木莉紗)  
・ポケットにケータイ、ケータイに友達、みな入ってる(宮崎哲生)

ここにあげた四首の歌は、ケータイから送られてきた歌です。とても、か

あーるい歌のように見えますが、現代の若者の心がとてもうまく表現されていると思われます。たとえば、最初の歌のように「ケータイ」では、前日や寸前に打っていた言葉が「予測変換」されて出てくるしかけになっていることです。

「か」と打っただけで前に打っていた「顔はまあまあだけど」と即座に出てくるのですね。私なら「かわの(河野)裕子は…」(昨年の八月十二日に

痛で亡くなり、亡くなる寸前まで薬紙やティッシュに歌を刻み続けた歌が一冊の歌集―「蝉声」になり、最近刊行されベストセラーになっている」とか「かきくへば鐘が鳴るなり」と出てくるでしょうが、便利と言えば便利で、繰り返しする必要のない合理性です。A T O K (エイトック)の頭のよさですね。もつといえ、潜在意識と言うか今現在の無意識部分が変換されたのです。

つづいて、インターネットで安易に見れる「wikipedia」(ウィキペディア・検索できる現代の万能の辞典)にも載っていない「自分らしく生きる方法」を考えようとする歌です。

そして、先日、私の同志社女子大学の「創作」の授業で送られてきた歌です。ケータイ写メールで撮った「楠の木陰から射す秋のこぼれ日」の映像を見ながら、逆に、肉眼では見ることの出来なかった「秋木漏れ日のごとき加護」の「加護」を感じてうたった歌です。

さらに、ここ三年ばかり、ケータイだけで短歌を作ってきたという立命館

大学大学院生の宮崎君が見せてくれた「ケータイ」の歌です。まずは「ポックettoにケータイ」と「ケータイ」の一般的な位置を特定して「ポケット」に入れ、「ケータイ」に登録されている何百という「友達」をうたい、さらに「神」に変わったかのように君臨する「ケータイ」に、何もかも「みな入っている」と表出するのです。「ケータイ」の現代における世界観をみごとくうたいきっている。だからといって、作者がそれを肯定しているわけでもあるまいとおもわれます。ここには、「作者」の近・現代短歌的な個人的な〈私〉はどこにもいず、普遍的な現代のケータイを駆使する人々の〈私〉がいるだけである。

さらに、もう一つ思ったことは、最近の若者や高校生が「ける」「かも」や文語の助動詞を使わなくなってきたことを実感したことである。以前は文語を使った格調高い歌もあったが、ケータイやパソコンの画面を見ながら「A T O K」の知的言語の予測変

換機能を使用して五七五七七を作って送ってくるのである。

・3332250004\*(すきなんだ) 恥ずかしがりな僕だから貴女に送る恋の番号(高原冨香)

今年の「SEITO百人一首」には、こんな歌が投稿されてきた。従来のようにペンや鉛筆で「メモ」をとって、短歌を作るのではなく、ケータイ上の画面の「数字」を押しながら作っているのである。「すきなんだ」という言葉の前に、先ずは画面上の「数字」があり、それを押すことによって「貴女に送る恋の番号」を確認しているのである。

もうここでは「文語短歌」「口語短歌」という範疇は何の効果もなく、五七五七七の形式にケータイの文字が躍り、まことに軽快なりズムを醸しているのである。

# ほろ酔い詩歌紀行

## 吉井勇の酒



日高昭二

(神奈川大学教授)

かにかくに祇園はこひし寐るときも  
枕の下を水のながるる

吉井勇を歌人として世に知らしめた

のは、明治四十三年に刊行された歌集『酒ほがひ』である。雑誌の『明星』や『スバル』などに発表された七百十九首を収めてある。のち、「すでに情痴の味を解し杯中に人生を觀るの境地を会得していた」とみずから回想もしているように、酒なくして人生はないとする声に満ちている。薩摩士族で伯爵家の血筋をひき、東京高輪に生まれた遊蕩歌人の、まさしく酒をことほぐ歌声である。

少女言ふこの人なりき酒甕に凭りて  
眠るを常なりしひと  
酒びたり二十四時を酔狂に送らむと

してあやまちしかな

酒肆に今日もわれゆくVERLAINE  
あはれはれとて人ぞはやせる

吉井勇は、詩人の北原白秋や画家の石井柏亭らとともに、隅田川をセーヌ川になぞらえ、東京をパリに見立てては耽美享楽の風を競っていた青年芸術家の一人であった。自身を、フランスの象徴詩人ベルレーヌになぞらえているのもそのあらわれである。

しかし、勇の声価を高めたのは、京都祇園を舞台にして歌われた「祇園冊子」の連作で、歌集『酒ほがひ』の絶唱としてよく知られていよう。その代表歌といえ、次の一首。

枕の下の水は、いうまでもなく加茂川である。そのせせらぎの音が、彼の旅寝の情趣をかきたてている。その水が、あたかも芸妓たちの紅粉の香りと酒の匂いを孤独な憂愁に変える働きをしているともいえる。彼の生涯をつらぬいて流れつづける、京恋し、祇園恋しの情緒の源泉でもある。

祇園を舞台にした吉井勇のバツカスとヴィーナスの世界は、やがて所を変えて東京の歓楽街へと移される。『東京紅燈集』(大正五)がそれで、新橋が、柳橋が新たな舞台となる。折しこのとき、赤木桁平の「遊蕩文学撲滅論」が出て、彼は長田幹彦・近松秋江らとともに、酒と女に酔い痴れた「浮華狂躁の世界」をあげし批判される。勇は翌年の歌集『祇園双紙』のなかで、「相聞の歌さへ遂に許されぬ世をうらみわびわれは旅ゆく」と、皮肉な返歌

をもつてそれに報いた。

これ以後、吉井勇は、多く旅にその時を過ごすようになる。筑紫の果てにさすらい、京に舞い戻り、また伊勢へと赴き、さらに東京へ帰るなどして、過去の追憶にひたるようになる。

気のふれし落語家ひとりありにけり  
命死ぬまで酒飲みにけり

ありし世のありのことごとく偲びつつ  
馬楽地蔵に酒たてまつる

馬楽は、勇が愛した落語家の蝶花楼馬楽で、狷介な人柄で知られ、のちに発狂して果てた。勇はその馬楽の句「道楽を人のほむるや春の風」などの「奇矯なる筆」も愛したが、また彼を題材にした戯曲「俳諧亭句楽の死」「句楽と小しん」など一連の「句楽もの」がある。「小しん」とは、馬楽とともに彼が愛した盲目の落語家柳家小せんであり、新内語りの紫朝も含めて、勇はこうした市井の芸人にことのほか惹かれるところがあった。いや、そうした

市井の芸人とどまらず、歌舞伎座や新橋演舞場などの座付歌人といった趣で、芝居の情景を歌に詠み込んだ「芝居小景」「劇場小景」などの一連もある。彼の歌が、どこか芝居がかっているのもそれゆえであろう。

そうした勇の世界が、がらりと変わったことを告げるのは、昭和になつての歌集『人間経』（昭和九）以後のことである。すでに勇は、昭和五年ごろより神奈川の相模野に庵をかまえてひとり暮らしを始めていて、人生をふりかえることがしばしばだった。

酒みづき無頼たはれをさまざまの名  
を負はされてわれや来にける  
洛陽に酒を酌みしは昨夜のことよ  
ひはひとり秋風を聴く  
われからの落魄なればおもしろきぞ  
しき酒銭いかにして得む

彼と酒のつきあいも、かつてとは大いに異なっている。それが旅の空ともなれば、酒の景色もいつそう違った味

わいになるのも自然だ。

はたた神いきどほろしく鳴り出でぬ  
いまこそ酌まめ酒麻呂の酒

酒麻呂とは、高知の酒造家伊野部恒吉を戯れて詠んだもの。京阪から四国土佐に入り、葦生の猪野々の里に滞留したころの歌であるが、彼の酒が遊蕩を越えて酒脱自在の境地にあることを知らせる歌がつづいていく。

猪野々なる山の旅籠の夕がれひ酒の  
さかなに虎杖を煮る  
寂しければ或る日は酔ひて道の辺の  
石の地蔵に酒たてまつる  
月夜よしこよひの酒のさかなには生  
椎茸を焼くべかりけり

祇園の歌があまりにも人口に膾炙したために、吉井勇にはこうしたさすらいの旅が見出した酒の風景があったことを知られずに来たようだ。

# どんぐり谷



## 内野潤子

(歌人・エッセイスト)

「どんぐり谷にゆこう」と一人が言う  
と、今日は大冒険の日になる。子供  
の足では家の近くから三十分近くかか  
るのだ。

昭和の初めの頃である。言いだすの  
はいつも私の兄だった。近所の子供達  
を集めてはいろいろなことをするエネ  
ルギーのかたまりの兄は、空気銃を  
買ってもらって、近くの家の外燈を割  
り、母があやまりにゆくような子供  
だった。

いつもの見馴れた町をぬけて、ひつ  
そりと広い旧道を二筋も渡り、尚進む  
とそこからはうっそうとした木の並ぶ  
仄暗い道が現れる。その辺りからは、  
町の匂いはなくなって、農家の暮らし  
のたたずまいとなる。

そこまで来るとどんぐり谷はもう近  
い。子供達も少し安心する。兄の仲間  
の後ろから、こわごわとついていった  
私も、なぜか楽しい気分になった。仄  
暗い道を抜けた所に、広く明るい麦畑

が広がってその先には、目的のどんぐ  
り谷があった。麦畑の先はゆるやかな  
坂道となり、丘のなごりのような雑木  
林となる。どんぐりの木が多いので、  
秋にはそれを拾いにゆくのだ。雑木林  
に入るとかなり高くて見下ろすと目の  
前に広い田畑がつづいていた。遠くは  
るかに私鉄の武蔵野線の二輛の電車が  
走ってゆくのが見えた。今の西武池袋  
線だと思う。ずい分遠くに来てしまっ  
たと、私は電車のすぎゆくのを眺めて  
いた。

春になると、どんぐりの雑木林から  
見下ろす田畑の道には田芹が一面生え  
ていて、それを摘んだり、嫁菜や蓬も  
摘んで夢中に時をすごしたりした。帰  
る時は皆におくれないように必死で  
走ったり歩いたりする。

祖母が芹の佃煮を作ったり、蓬で草  
餅を作ったりしてくれた。豊かな食草  
であった。

そのどんぐり谷へ私は本当に久々に  
行ったのは長い戦争が終ってからの事  
である。

十七歳で終戦を迎えた時、たまたま学徒動員で知り合った大学生が私の家を尋ねてきたのだった。

戦後の町には二人で語り合う喫茶店など一つもなくて、私は彼とどんぐり谷に行ってみることにした。

果して昔のような景色が残っているのだろうか、半分は危ぶみながら道筋はちゃんと覚えていて、話し合いつつただ懐かしい道を歩いていった。藁の匂いのする処まで来た時は、わっとう思いがした。

やはりそのままに道は続いていた。麦畑の上の空は広くて戦争の終わった開放感を感じしみ嬉しいと思った。

二人でどんぐり谷の木の下の下に坐って、とりとめなく話をして、私が探していた人はこの人だったのかと不意に切ない気持ちになったのである。只並んで坐っている丈で、十分に充たされていたのだった。

その当時、兄は戦地に征ったまま、復員していなかったたので両親は心を痛めていた。

或る日のこと、近くに住んでいた兄の友人の一人が「どんぐり谷に行こうよ」と誘ってくれたことがあった。

彼は昔の遊び友達で、仲の良い好青年だったので「先に行つて、後から行くから」と答えた。すると傍に居た母が「貴女一人で行かないでTちゃん連れていきなさいよ」と言うのである。二つ違いの妹のT子は素直な性格で私の言うことも何でもきいてくれた。

二人でどんぐり谷に行くと、先に來ていたKは「なーんだ、どうして一人で来ないの」と言う。私はこの人は何を考えているのかと少しも不審に思わなかった。

母は、Kが女の子をすぐ好きになり、次々と相手が変わるということを兄から聞いていたらしい。勘のいい母は妹をつれてゆけば安全と思ったのだ。後になって考えると、いろいろ思い当たる。私も娘が年頃になった折には、いつも守る姿勢があった。

その後Kに会った時、私は心に決めた青年のいることを告白した。

彼は「そうか、よかったね」と明るく言ってくれた。背が高く、ハンサムな彼は、女の子にもてる好青年だったと今も思う。

私のどんぐり谷に、最後に連れだつたのは夫と幼い娘と、夫の友人Tさんとそのお見合いの相手の五人であった。夫の友人Tさんは大学の先輩で、大変優秀な助教教授であった。夫は尊敬しているTさんをととても大事にし、又頼りにもしていた。

自分が結婚して、一児の親になっている夫は、独身のTさんを何とか結婚させたいと思っていた。そしてお見合いをした相手を家につれてくるということで、どんぐり谷に案内することになったのだ。昭和二十五年頃か、まだ麦畑も林も残っていた。しかしこの結婚は成立しなかった。それは私が自分の親友をどうしてもTさんの妻にしたいと願ったからで、それは見事に成功し、いいご夫婦になった。

どんぐり谷は今跡かたもないという噂を聞いたのは、大分前のことである。